九州産業大学国際文化学部紀要　第27号〔1〕−〔13〕(2004)

永田和宏論

和田　勉

一

永田は細胞生物学を研究する生活を送っているゆえに、独自の感性が育まれ、それが文学に反映している。主な研究内容を著書にまとめた『分子シャペロン[注1]による細胞機能制御』(平13、シュプリンガー・フェアラーク東京)の「まえがき」で、「すべての遺伝子の配列が明らかにされたことによって、これからの生物学における研究スタイルは大きな変化を余儀なくされることであろう。すでにポストゲノムという言葉は市民権を得、実際にさまざまな分野において多くの方法論が模索されている。ポストゲノム研究の中心をなすのは、いうまでもなく、個々のタンパク質の同定から始まって、タンパク質の構造であり、その機能、さらにはそれぞれのタンパク質間の相互作用である」と述べている。

このような学究生活の一方で創られる永田の短歌は、作者の実人生と密接に関わっている。作品の読解は、その作品が生まれた実生活上の背景への理解がないことには、うまく機能しないことがあるが、「アララギ」の系譜につながる永田の場合にもそれは当てはまる。

加藤孝男は、『新研究資料現代日本文学　第五巻　短歌』(平12、明治書院)の中で、「背後にあるのは、科学者としての認識の眼であり、永田においては医学研究者(細胞生物学)としての顔と、歌人・批評家としての顔とが、時に鋭く分裂するかとみせながら均衡を保っている。そこに永田の独自な存在意義がある」と的確にまとめている[注2]。

永田の八冊の歌集の中で、遺伝子に関することが詠まれている歌を中心に考察したい。なお、短歌を独立した作品として扱い、修辞法・素材の処理法・語法・構造などを客観的に明らかにしたい。

また、『表現の吃水——定型短歌論』(昭56、而立書房)や『解析短歌論——喩と読者』(昭61、而立書房)等の評論と実作との関わりや、親炙する斎藤茂吉との関わりについても具体的に分析したい。茂吉のテクストを前景としつつ、短歌のありようを模索した永田を重ね合わせることによって、現代の歌人にとっての詠むという行為、およびその背後から浮かび上がってくる

現代短歌の諸問題について考えたい。

二

遺伝子に関わることが詠まれている歌を中心に見ていくことにするが、前半の四歌集にはほとんどない。

『メビウスの地平』（昭50、茱萸叢書）には、青春期の心情や恋愛が瑞々しい歌として詠まれている。理科系の歌人としての特質は、この歌集には乏しく、「わが愛の栖といえばかたき胸に耳あてており　いま海進期」などがある。「海進期」という地学の用語を用いて、愛の高まりゆくさまを、陸地の上に海が広がる様子と重ねて捉えている。なお、「弓なりに橋さえ耐えているものをどうしようもなく熟（みの）りゆく性」では、結句の「熟（みの）りゆく性」に注目すべきである。耐える自我とは関わりなく、遺伝子のプログラムは独自に働き、身心に性的な成熟をもたらすということが象徴的に詠み込まれている。

『黄金分割』（昭52、沖積舎）では、身辺の日常を鋭敏な感覚で捉えたり、そこに心象が託されたりしている。「心臓穿刺ののちゆわゆわとふくらめる白きねずみを掌につつみたり」や「採血の終りしウサギが量感のほのぼのとして窓辺にありし」のように仕事にまつわる内容も詠まれている。ヒトと同様に遺伝子から成り立つ実験動物に寄せる切実な思いが創作の契機となっている。

「スバルしずかに梢を渡りつつありと、はろばろと美し古典力学」や「フォルマリンの中なる胎児雪の日は雪の翳りを身に映しいつ」では、理科系らしい内容が詠み込まれている。「スバルしずかに」の歌の「古典力学」とは、『広辞苑』に拠ると、「巨視的物体の運動に関する物理法則を中心とする理論体系。ガリレイに始まり、ニュートンが力および質量の力学的概念を導入することによって確立した」ものである。これによって天体の運行は見事に解明されていることへの賛嘆が、この歌の下句には込められている。

『無限軌道』（昭56、雁書館）では、身辺を取りまく状況や心身の状態が詠まれている。また、母や友人の死を悼む歌も収められている。「われのものにはあらざる長き髪が落ちぬ無菌灯火の培養の隙」や「手をいれてウサギの腹より摑み出すげに一連（つら）のものなる臓器」のように実験室での生活を素材としている。「肉体の死にやや遅れ億の死の進みつつあり　Tubercule（ツベルクル） bacillus（バチルス）」では、人が亡くなった後、体内で共生していた結核菌の億に及ぶ死をイメージしたもので、医学者らしい独自な捉え方である。

『やぐるま』（昭61、雁書館）では、身辺で起こることへの感慨が主に詠まれている。「放射性（アール）・物質（アイ）わが日常に乱るれど感性毳立つばかりにて候（そろ）」[注3]や「線虫の持てるは卵巣と消化管のみ、生

命の意味単純にして人を脅やかしむ」のように仕事に関わる内容もある。生物学者の間でよく知られているように、「線虫」は細胞数が約千個のシンプルな動物であるが、線虫の遺伝子は二万で、三万のヒトとそれ程違いはない。まして、ヒトとよく似た遺伝子も多数あることが「生命の意味」を突きつけるようで、「人を脅やかしむ」要因であろう。なお、この歌では詠み込まれた内容と合わせるように、上句と下句の間に読点を打つことで、短歌的な声調の要素をあえて壊して散文化している。そのモチーフは短歌の声調を壊して散文の地面に接続してしまいたいというよりも、あらかじめメタフィジカルな短唱の欲求があってその無型性に向かって解体したいのだと受け取れる。上句の科学的な事実が問いとして機能しており、下句でそれに答える形で連結させている。

「人体は無数の螺旋閉じこめてときに伝うるとおき潮鳴り」や「抗体価微熱のごとく昇りいん家兎は飼われて遠雷の窓」のように理科系らしい捉え方も見られる。特に「人体は」の歌では、人の身体が二重螺旋の遺伝子により成り立っており、海からのはるかな進化の歴史を経ているということを踏まえて詠まれている。

これらの四歌集では、日常を凝視しつつ、それらの奥に潜んでいるものの意味を見出そうという意図が窺える。その際には仕事に関わる内容として詠み込んだり、理科系からの独自な視点を採り込んだりしている。

後半の四歌集には、遺伝子に関わる歌が目立つので、詳しく見ていくことにする。

『華氏』（平8、雁書館）の巻頭には、師である高安国世逝去の報にアメリカで接した際の驚きと悲しみが詠まれている。結末の近くにも高安にまつわることが、「君亡くて七年　君の名を残す講演会に人はあふれき」と詠まれている。『華氏』には、日常の種々の事象に接した際の感慨が的確に表されている。「ゆれいたる数字しずかにとどまりて微量の砒素ははかりとられき」や「つゆくさ色に指染め白衣染めながら真夜植物の性に寄りゆく」のように実験も素材として詠み込まれている。「つゆくさ色に」の歌では、同じ遺伝子から成り立っている植物の性染色体を分析する姿を客観的に捉えている。植物に寄せる同様の視線は、「死ぬことを思わず人も樹も立てりさびし立つこと影濃き晩夏」にも窺われる。植物の生も動物の生も、命あるものとして同等に捉えているところが独自である。

「地磁気はつかな電流となり流れいん秋の宙航(ゆ)く候鳥のうち」や「ヒトとなる過程に体毛を失いて、人の赤子が湯に浮かさるる」のように理科系らしい視点も見られる。「地磁気はつかな」の歌では、わずかな地磁気によって飛ぶ方向を知る渡り鳥を、同じ遺伝子を持つ生命体として共感をもって詠み込んでいる。

『荒神』にも「海を航く鳥に地磁気の影射して鳥の脳(なずき)は凛(つめ)たか

らんか」とあり、地磁気と関わって生きる渡り鳥に強い関心を持っていることが分かる。

「ヒトとなる」の歌では、体毛を持たないことを進化の過程で選択した人間の身体的な特質と捉えていることが分かる。同様の視点は、『饗庭』の「体毛を持たざるゆえか窪多き人体に射す影の濃淡」にも窺える。

遺伝子に関わる歌を次に挙げる。

遺伝子の配列を読む単純に曇りて長き午後をこもれり

強いて言わば遊びにも似て遺伝子の切り貼りぞわが生業（なりわい）のうち

紫外線とう見えざる光に浮き出づる通草色（あけびいろ）なる遺伝子ほのか[注4]

カリフォルニアより遺伝子届く遺伝子は微量、花粉のこぼれたるより

人間の遺伝子をもつ白ねずみ白きねずみはわが掌の上に

「強いて言わば」の歌の「遺伝子の切り貼り」とは、遺伝子を酵素で切り貼ることによる塩基配列の組み換えのことである。下句の「わが生業（なりわい）」を上句の「遊びにも似て」という意味的な比喩によって相対化している。

「人間の」の歌では、人間とねずみが同じ遺伝子により成り立っていることが前提となっている。しかも、そのねずみは実験動物として今「掌の上」にあるという感慨が作歌の契機となっている。ただし、遺伝子を通して新たな認識が示されているわけではない。もっとも、観念的な意味付けを拒みながらも、したたかな手応えを覚えさせる新たな歌に至るというのは容易なことではあるまい。

『饗庭』（平10、砂子屋書房）には、家族との関わりや研究生活の日常を詠んだ歌が多いが、国内や国外を旅行した折の羇旅歌も目につく。

「ルシフェリン・ルシフェラーゼと言いたれば理科系人（びと）は嫌われたらむ」や「枯れ蔦の根がびっしりと覆いいる洋館点（とも）り脳髄のごとき」のように理科系らしい視点も見られる。「ルシフェリン」の歌には左注として、「ホタルの生物発光は、ルシフェラーゼ（酵素）によって、発光物質ルシフェリンが酸化されることによる。」と記されている。蛍の光に感動するのではなく、発光の現象をメカニズムとして分析しているところに理科系の歌人としての特質がある。この歌に限らず、永田には感情に流されず、現実をリアルに見つめる醒めた目がある。ただし、石浦章一に拠ると、「ノルアドレナリンやドーパミンなどの脳内物質は覚醒物質とも呼ばれ、人間が活動状態になるときに働（はた）らいているのであり、蛍に注目するのみならず人間に焦点を当てて捉える歌もあってよいだろう。つまり、人間をミクロの神経回路の視点から捉えるというようなことである。[注6]

「枯れ蔦の」の歌では、結句の「脳髄のごとき」に理科系の学

者らしい比喩が効果的に用いられている。この比喩によって、蔦の根に覆われた洋館についての独自な捉え方が明瞭に示されている。永田の言葉に拠れば、喩とは、「感動の現場を再現して読者にそのまま体験させるための装置である」[注7]ということになる。

遺伝子に関わる歌を次に挙げる。

遺伝子の進化を言いてスライドの四五枚がほどとつとつと
　渡る

遺伝子を釣るなどと言いて疑わぬわれらの会話は聞かれて
　いたり

遺伝子を切り貼ることも日常の一部となりぬ朝顔の紺

にんげんの遺伝子をもちて生まれこしマウスは眠るおが屑
　のすみに

わが見つけわが名付けたる遺伝子をもてるマウスを手の窪
　に載す

夜盗蛾（ヨトウガ）の細胞に発光遺伝子を導入したり　夜が静かなり

液体窒素に蔵いおくべき胎児の細胞にわが釣りし遺伝子を
　導入す

「遺伝子を釣る」の歌には、仕事の内容が詠まれており、細胞生物学の分野で日常的に使われている用語が巧みに用いられている。「遺伝子を釣る」とは、タンパク質を見つけたら、そのタンパク質を合成する遺伝子はどれかということで、関与する遺伝子を見つけてくることである。作業内容について具体的なイメージを喚起する言葉ではあるが、歌そのものとしては、遺伝子の解析に携わる者として、事実の奥にあるものを見つめ、不可視のものを捉えようとする姿勢は乏しい。だが、遺伝子を通して人間の生存の意味を問うという、根源的で本質的な問題について表出することもあって然るべきだろう。もっとも、合理性と整合性の勝っているのが永田の短歌の特質であり、これ以上メタフィジカルな味わいを強めて、人間の情念から遠ざかれば、詩的な感動を削ぐ結果になりかねまい。

「遺伝子を切り貼ることも」の歌は、詞書が「遺伝子」としてまとめられた八首の中の一首である。結句の「朝顔の紺」というところに詩人としての把握があり、そこに至るまでは細胞生物学者としての表白であるという見方さえ可能だと思われるが、その二つの顔を持つ両義的な存在として生きるところに、歌人としての永田の意義があるだろう。

「遺伝子」の八首では、遺伝子の研究に関わる者たちの「鼻梁とうもっとも脂濃き部分を近づけてなす議論いつまで」のような煩瑣な人間関係が主に詠まれている。遺伝子について考えることによって特に何かの啓示を得ようとしているというわけではない。ここで永田に期待するのは、『表現の吃水――定型短歌論』の中で、「ますますものが、ものの本質が見えづらくなってゆく現在の情況の中で、見えないから見えるものだけを小器用

に歌い取ってゆくというのではなく、自己存在をどのように問い直そうとするのかという地点からしっかりと主題を見据え、それを熱く果敢に部厚く追求するという姿勢こそが、いまもっとも切実に求められる」（傍点原文）と述べているような視座から捉えることであろう。肉眼では見えないものを見ることによる認識の深まりである。ただし、遺伝子にまつわることを主題として見据え、しかも観念的にならないように表現するのは容易なことではあるまい。

「にんげんの」の歌では、ネズミがヒトと同じ遺伝子により成り立っている生き物であるという認識が作歌の契機となっている。しかもこのマウスはいずれ実験に使われるものであり、この歌が単なる嘱目を越えた、言わば命あるものの哀しさを感じさせるものとなっている。人間を他の動物と二項対立的に捉えるような視点は、ここにはない。

「わが見つけ」の歌は、『饗庭』の「あとがき」に「一九八六年に私が見つけた新しいストレス蛋白質は、肝硬変や脳虚血の際にも重要な働きをしていることがわかってきた」とあるような事実を踏まえているだろう。挿入された「遺伝子」という生硬な専門語さえもが、まるで詩語のように機能している。

『荒神』（平13、砂子屋書房）には、初老にさしかかった作者の身辺の出来事を詠んだ歌が収められている。なかでも、家庭でのことや職場でのことが中心となっている。「単為生殖さびしき性をくりかえしシロバナタンポポ鉄路を辿る」のように理科系らしい視点も見られる。

遺伝子に関わる歌を次に挙げる。

ミトコンドリア・イヴを語りて行く道の畦道暗し萱草の花

人間はDNA（遺伝子）の器にしかすぎぬと思えばなんで泣くことがあろう

体内時計の遺伝子はふたつ学生らと読みおれば部屋に陽は深く射す

体内に時間を刻む遺伝子のありとし読めり猫は欠伸す

遺伝子の複製を娘（こ）に教えいしがさびしき妻は早く眠りき

遺伝子の梯子（ラダー）をフィルムに透かし見る窓にいつもの守宮（やもり）は居たり

「ミトコンドリア・イヴ」の歌では、アフリカで誕生したとされる人類最初の女性のことが話題となっているのであろう。上句のともすれば概念的とも言える内容を、下句の着実な写生によって引き締めている。

「人間は」の歌では、ドーキンスが『利己的な遺伝子』で説いた人間は遺伝子の乗り物にすぎないと言う説を踏まえた感慨を上句に据え、それについての個人的な呟きが下句に記されている。上句での自問におのずから答えることで、内なる葛藤が鎮められている。同じような理科系の歌人でDNAを歌に詠み込んだ井辻朱美の「杳（とお）い世のイクチオステガからわれにきらめき

て来るＤＮＡの砕片」（『コリオリの風』平５）が宇宙を舞台にしたファンタジックな発想の作品であるのと比べると、その違いが明らかである。永田は、置かれた現実を踏まえて、あくまでその枠内での思いを表白している。

「体内に」の歌では、結句の「猫は欠伸す」で、遺伝子などとは無関係に生きる猫を対置し、四句までの科学的な内容にポエジーを盛り込むことに成功している。顕微鏡で見る真実と外界の猫の欠伸という現象が、屈折点を境にダイナミズムを生んでいる。それは形而上学的な〈真実〉を突きつけられたことへの、現時点での答えられぬ〈答え〉の描写として機能している。

「体内時計」の歌の「部屋に陽は深く射す」や「遺伝子の梯子（ラダー）を」の歌の「窓にいつもの守宮（やもり）は居たり」という表現は、平明に見えて身辺を精密に捉えたしたたかなリアリズムであると言える。あわただしく過ぎ去る日常から周辺の景物へ、視ることに伴う感情移入を抑制してゆき、ある一点に焦点を合わせて的確なリアリズムによってまとめている。

『風位』（平15、短歌研究社）には、平成十年から十二年までに身辺で起こったことにまつわる感慨が詠まれている。妻や子や師や教え子など身近にいる者たちとの微妙な感情の揺れが巧みに表出されている。特に妻の病気や恩師の死など作者を見舞った哀しみが切実に詠み込まれている。それが永田が巡り合わせた思いがけない運命、風向きということで、表題にはそのような思いが込められていよう。なお、犬や亀や鶴など、ヒトと同じ遺伝子からなる動物たちがこの世に生きる姿を詠んだ歌にも優れたものが目立つ。巻頭の「亀眠るうすき瞼（まぶた）のうらがわを渉る乾坤初冬のひかり」では、亀の瞼に映る初冬の天地に焦点が当てられている。

「メモリーはそろそろギガでも効かなくてカラスノエンドウ金網を這う」や「好き嫌いを交えぬ評価のあるゆえに科学はある面のわれを支うる」のように理科系の作者らしい歌も目につく。ただし、「サイエンス以外はなべて遠ざけて来しと聞きしかばすなわちひるむ」のように、理系の人たちの集まりに出席すれば、文学者でもあるゆえにかえって負い目を覚えるのである。「メモリーは」の歌には左注として、「マイクロは百万分の一、フェムトは千兆分の一、ギガは十億倍」とある。「好き嫌いを」の歌には、客観的な評価によって成り立つ科学に引かれる理由が率直に表明されている。

遺伝子に関わる歌を次に挙げる。

「六〇兆の細胞よりなる君たち」と呼びかけて午後の講義を始む

たったひとつわが遺伝子を破壊せしマウスは死せり受精十日目

「六〇兆の」歌では、ヒトの身体は六〇兆個の細胞から成り立っていることを知識として伝えることはできても感覚として理

解させることは難しいが、細胞生物学者であるゆえに、そのような生命の仕組みを学生たちに教示していることが詠まれている。因みに、永田編『細胞生物学』（平15、放送大学教育振興会）の中で、「私たちの体の中には、およそ六〇兆個の細胞がある。（中略）私たちの体の中のすべての細胞のＤＮＡをもし一直線に並べたら、地球と太陽の間を三〇〇往復する長さ（一〇〇〇億km）になるという驚くべき換算もある。個々の細胞は、とても目には見えない極小の存在である。しかし、その内部には驚くべき量の情報が詰まり、その情報に従って、さまざまな分子が相互作用し、構造を作り、そして生命活動を営んでいるのである」と記しており、このようなことが講義内容に含まれていたと思われる。そして永田は、このような視点によって、ヒトを含む万物の生命活動を見ているのである。

「たったひとつ」の歌には左注として、「HSP47をノックアウトするとマウスは胎生致死になる」とある。永田は『分子シャペロンによる細胞機能制御』の「コラーゲン特異的分子シャペロンHsp47」の中で、「Hsp47をノックアウトしたマウスは胎生一一・五日目で致死となり、発生に必須の遺伝子であることが明らかになった」と記しており、これを踏まえて詠まれたものであることが分かる。「受精十日目」というのは約十日ということで、短歌の音数との関連もあっておおよそに表記したのであろう。

三

永田が斎藤茂吉に親炙していることは、短歌の素材として詠み込んでいることや、岡井隆・小池光との共著『斎藤茂吉――その迷宮に遊ぶ』（平10、砂小屋書房）を刊行していることから分かる。[注8] また歌集『やぐるま』の「あとがき」に「昭和五十六年から五十九年にいたる四年間の作品、二百五十余首より成る。このあと、私は二年間アメリカで研究生活を送ることになるのだが、その直前で切った。『つゆじも』が当然頭の隅にはあった」と記しており、歌集を編集する際にも茂吉を参考にしていたことが分かる。『つゆじも』には、茂吉がドイツに留学する直前までの歌が収録されている。それで、永田に茂吉のどのような影響があるのか具体的に分析したい。

『華氏』には、例えば次のような歌がある。

引用されていたる名前に思いあたる茂吉に厳しかりしか呉秀三先生[注9]

茂吉食いし赤黄茸（あかき）何なりしゼノア十月五日の夜更

大正十一年九月十七日維也納にて茂吉の見しはタマゴタケならん

維也納にて茂吉の成せし小実験「重量感覚知見補遺」の退屈

父の呉れし金貨は使う術あらず茂吉全集の前に立て置く

自動ピアノ片隅にして鳴りいたり北のホテルに「つきかげ」を読む

「大正十一年」の歌は、『遠遊』の「維也納歌稿　九月十七日（日曜）、Tullnerbach 行」と詞書がある「樅木原深きをくぐりくれなゐのあざやけき斑の茸を見たり」や「都會より來にし人々茸をばルックサックに大切にせり」を踏まえたものだろう。留学していた茂吉の姿に思いを馳せながら、茂吉が関心を持った茸の名称を推測し、具体的に詠み込んでいる。

この他に、永田の「性欲も淡くなりしか秋の日の焚火のごとく老けゆくらしも」は、茂吉の『たかはら』の「こぞの年あたりよりわが性欲は淡くなりつつ無くなるらしも」をヒントにしていると思われる。茂吉の歌は昭和四年の作で、「一月廿九日、仰臥、耳に心臓の鼓動をきく」と詞書がある。どちらも性欲を科学的に分析しようとする姿勢があり、その衰えを客観的に詠み込んでいる。四十七歳の茂吉はストレートに表現しているが、永田は「秋の日の焚火」というイメージによって消えゆくさまを具体的に表現している。

『饗庭』には、詞書が「茂吉」とある次の六首が記されている。

木漏れ日に茂吉確かに笑いたり胸像の丸き眼鏡のあたり

馬を飼う匂いながるる辻を過ぎ茂吉生家はもうこの辺り

雪を踏みて歌碑をたどれり茂吉の見し蔵王の角度を確かめながら

小さき女性の足跡ひとつまっすぐに茂吉の墓に行きて戻れる

わが生れしその日茂吉は狼石におきな草など描いていたり[注10]

浅草に行きしことなし浅草にどじょうをおごると君は言うとも

詠み込まれた内容から、茂吉の生家を訪れた折の感慨をまとめたものであることが分かる。その他にも、『饗庭』には、次のような歌が収められている。

茂吉全集の並べる上を住処とし色薄き猫がとろとろ眠る

学会を抜けて着きたるこの町は茂吉の飯の故に親しも

支那街に混血をとめ見ざりけり坂多き町に茂吉をおもう

小さき脳をスライスにして染めているこの学生は茂吉を知らぬ

「学会を」の歌には、「唐津・その他」と詞書がある。「茂吉の飯の故に親し」みを覚えるというのは、『つゆじも』の「唐津濱」と詞書がある中に「海のべの唐津のやどりしばしばも噛みあつる飯の砂のかなしさ」や「飯の中にまじれる砂を氣にしつつ海邊の宿に明暮れにけり」とあることに由るだろう。つまり、飯の中に砂が混じっているのを気にしていた茂吉に思いを馳せているゆえに、唐津に親近感を覚えるというのである。

「支那街に」の歌は、茂吉の「四海樓に陳玉といふをとめ居り

よくよく今日も見つつかへり來」（『つゆじも』）や「おもかげに立つや長崎支那街の混血をとめ世にありやなし」（『白き山』）や『童馬山房夜話』や「手帳一」に記された茂吉の姿を踏まえたものであろう。

『荒神』には、次のような歌がある。

「色欲も無所畏無所畏」と口の端にくりかえしゆけば夕べはなやぐ

人の名を思い出せずに苦しみし茂吉の齢を渉らんとする

笛吹けるショウペンハウエル思うとき大ガガンボが障子に止まる

「色欲も」の歌には、左注として、茂吉の「われ学生群に向き色欲も無所畏無所畏と言ひたるあはれ」を踏まえていることが記されている。色欲も無所畏であると学生達に教えさとすことに哀れを覚えている茂吉を踏まえて、永田の歌では、茂吉の言辞を反芻することで、人間としての存在にはなやぐ気分を覚えるというのである。茂吉の独特な語彙と感性が反復されて蘇っていると共に、孤独な呟きとなっているところに現代を見ることができるだろう。なお、茂吉の歌は『寒雲』に収められており、昭和十三年の作である。

「笛吹ける」の歌は茂吉の「あやしみて人はおもふな年老いしショオペンハウエル笛ふきしかど」（『白桃』）を下敷きにしている。一八六〇年に七十二歳で亡くなった厭世主義者ショオペンハウエルの晩年の笛を吹くという行為に、茂吉は共感しているのである。[注11] 永田は茂吉のこの歌を通してショオペンハウエルと笛を吹くことを結び付け、更にそのようなショオペンハウエルに思いを馳せているのである。

茂吉への親炙については、同じ理科系の歌人として、生命体である人間の捉え方に共通のものを認めていることが分かる。ただし、茂吉には精神科医として狂気や異常心理への関心が顕著にあり、それが歌にも反映している。そのようなところは永田には乏しいが、その替わり遺伝子への関心が見られる。

茂吉を短歌の素材として盛り込むことで、永田の短歌が時間的にも空間的にも広がりを見せている。つまり、例えば歌や日記などによって把握した当時の茂吉の姿に思いを馳せることで、作品の世界が重層的になり、陰影を帯びたものとなっている。ただし、『短歌に於ける写生の説』にあるような「実相に観入して自然・自己一元の生を写す」というような技法や茂吉にある悲劇的な様相を帯びた境地を永田がそのまま継承しているとは言えず、現代歌人として独自に摂取している。

茂吉の強烈な魅力を吸収しながら、永田は自らの資質のありかを求めている。『やぐるま』『華氏』『饗庭』で詠む対象として採りあげた藤原定家と同様に、茂吉を乗り越えるべき対象として意識しながら、自らの歌人としてのありようを模索している。自己を呪縛する茂吉という存在から脱する方途を考えることで、

歌人としての新たな道が拓けてくる。それは、永田自身の言葉を借りるなら、「先人に伍して、先人とは違う視点から、それ以上の作を為したい、それはまた、自己励起の場」（『昭和の歌人たち〈昭和歌人集成別巻〉』平6、短歌新聞社）ということにもなるだろう。

四

永田の短歌では、手堅いリアリズムによって内面の微妙な揺らぎが捉えられており、それを象徴的に捉えた身辺の事象などが詠まれている。永田にとっては、家族のことを思うことも、顕微鏡の遺伝子を見ることも、宇宙の果てに思いを馳せることも自在である。日常を凝視し、生きてあるゆえの哀歓をリアルに表現しており、そこにはしたたかな詩精神が窺える。

評論活動で提示された作品構造論、時代論などの内容が、短歌の実作にみごとに活かされている。例えば、『表現の吃水――定型短歌論』の中で、「自ら問い、自ら答える以外ない文学の世界においては、その『問』をいかに遠くまで飛翔させ得るか、そしてその『問』をいかにうまくブーメランのように回収することができるか、が作品評価の要である」と述べている。更に、「一首における『問』と『答』のこのような合わせ鏡構造こそ、この詩型発生以来の基本的な構造なのであり、『問』の拡散性をいかに『答』の求心力によって支え得るか、『答』の凝集性をいかに『問』の遠心性によって膨らませ得るか、という点にこの定型詩の生命がある」と述べている。永田は実作において、上句で自問し、下句で自答し、内面の葛藤を巧みに表出している。また、語彙の独自さ、比喩の効果、リズムの変化など、定型と調和し葛藤しながら、自らの文体の確立を目指したことが窺える。

永田の遺伝子に関わる歌では、目に見えないものの中に普遍を見、それを更に己れという特殊の中に還元している。このように永田にとって、細胞生物学という職業は己れの存在を問い返すのに欠くことのできないものとなっている。

中野重治は『斎藤茂吉ノオト』（昭16、筑摩書房）の中で、「抽象的世界を抒情詩の対象として引き出したことは茂吉の大きな力であった」と述べている。これは永田に引き継がれたところであり、永田は細胞生物学の仕事そのものを短歌に詠み込んでいるだけでなく、現実のさまざまな事象を科学の教養を踏まえて見ているところが独自であり、そこに文学としての先蹤性もある。人文科学と自然科学の融合したところで、現代の文学たり得るテーマをこの短歌という形式の中で問う試みが為されている。硬質な言葉で叙情の湿潤性を拭い去っており、知的な拡がりのある言葉を取り込むことで、現実への認識をあらたにすることが図られている。短歌における遺伝子という言葉は、読

者に硬質な叙情を喚起し、日常性からの異化作用をなしていると考えられる。

ただし、新しい思想が表白されているかどうかということも改めて問い直されねばなるまい。それはもはや単純な韻律に溶解する思想であり得るはずもなく、そのような韻律による詠嘆など永田においても拒否されている。ここで言う思想とは、永田の評論『昭和の歌人たち〈昭和歌人集成別巻〉』に頻繁に用いられている「発見」につながるものと言い換えてもいいだろう。肉眼では捉え難い遺伝子を歌の素材とする場合、単なる目新しさではなく、それほどの覚悟が求められるだろう。ただし、つまるところ「短歌の思想は、短歌の独自の詩型式と、言語の独自な象徴性によって作りだされる美の世界そのものの中にある」[注12]ということを当然の前提とすべきである。

それにしても、時代の感性を切り拓く思想を表出するためには、自己や生命や遺伝子というものについて更なる考察や凝視がなされねばなるまい。分子生物学者の柳澤桂子の短歌[注13]と比べると、永田の短歌は表現力においては優るものの、生命そのものを凝視した果てに歌に詠み込むということの評価となれば疑問も残る。

主宰する「塔」が「アララギ」の系譜につながるものであり、永田にも茂吉などの写実の伝統を継承しようという意識があり、その歌も着実な写生に支えられている。塚本邦雄や岡井隆などの前衛短歌をくぐり抜けた後の、茂吉などの近代短歌の見直しであるところに永田の特質がある。

注1　分子シャペロンとは、「未熟な状態のタンパク質に一時的に結合し、成熟するのを介添えする世話役タンパク質」（『分子シャペロンによる細胞機能制御』）である。

注2　三井修は『永田和宏の歌』（平12、雁書館）の中で、「科学と文学、その両者の間に本当の意味で幸福な架橋した最初の人物、私は永田和宏のことをそう思っている」と高く評価している。

注3　三井修『永田和宏の歌』に拠ると、この歌は岡井隆の「放射性物質（アールアイ）あつかふ部屋の若者はおどろくばかり感性撓（しな）ふ」という作品に対する返信として詠まれたものである。永田は「放射性物質（アールアイ）」を扱うのを日常としていたが、歌語として採り入れたのは、岡井の方が先である。

注4　三井修は『永田和宏の歌』の中で、この歌に茂吉の「屈（かが）まりて脳の切片（せっぺん）を染めながら通草（あけび）のはなをおもふなりけり」（『赤光』）の影響を指摘している。

注5　石浦章一『よくわかる生命科学――人間を主人公とした生命の連鎖』（平13、サイエンス社）

注6　F・クリック『DNAに魂はあるか』（平7、講談社）の中の、「私の言う『驚くべき仮説』とは、あなた――つまりあなたの喜怒哀楽や記憶や希望、自己意識と自由意志など――が無数の神経細胞の集まりと、それに関連する分子の働き以上の何ものでもないという仮説である」というような視点をいかに取り込むかということとも関わるだろう。

注7　永田和宏「喩と読者」（『国文学』昭58・2、のち『解析短歌論――比喩と読者』所収）

注8　『解析短歌論――比喩と読者』の「茂吉の直喩――『あらたま』を中心

に」や国文学編集部編「短歌の謎」（「国文学」臨増、平10・11）の「斎藤茂吉――謎だらけの茂吉」でも茂吉に言及している。

注9　呉秀三については、随筆「呉秀三先生」（『斎藤茂吉全集　第五巻』昭48、岩波書店）や「呉秀三先生を憶ふ」（『斎藤茂吉全集　第六巻』昭49）や「文學の師・醫學の師」（『斎藤茂吉全集　第七巻』昭50）や『つゆじも』の「賀歌」に詳しく記されている。

注10　昭和二二年五月一二日の茂吉の「日記」に「午後カズ子ヲ連レテ狼石ノ近ク百花園跡ニ行キ、おきな草ヲ見ツケテ寫生シ、若干ヲ採集シテ來タ」（『斎藤茂吉全集　第三十二巻』昭50）とあることを踏まえたものである。

注11　小池光は『茂吉を読む　五十代五歌集』（平13、五柳書院）の中で、「晩年のショウペンハウエルが楽器演奏（笛、フルート）を趣味とした事実がありやいなやを考証にしかかる。するとこれがどこにも見当らない（中略）ひそやかな楽しみの、それこそが生の側にみずからを繋ぎ止めるあかしとしての、その具体的イメエジの一例として『笛』が茂吉に直観せられている」と述べている。

注12　菱川善夫『現代短歌美と思想』（昭47、桜楓社）

注13　詳しくは、拙稿「柳澤桂子論」（「国語国文学研究」37号、平14・2）を参照頂きたい。